

2020 年度第 2 回学術情報流通推進委員会
議事要旨

1. 日 時:2021 年 3 月 11 日(木)13:00-15:10

2. 場 所:オンライン開催

3. 出席者:

(委員)

逸村委員(筑波大学), 今井委員(東京大学), 倉田委員(慶應義塾大学), 野崎委員(高エネルギー加速器研究機構), 深貝委員(横浜国立大学), 江川委員(東京大学), 相原委員(北海道大学), 林委員(科学技術・学術政策研究所), 中島委員(科学技術振興機構), 武田委員長, 木下委員(国立情報学研究所)

(陪席)

土井参事官補佐, 麻沼係長, 安達係員, 若狭係員(文部科学省), 合田部長, 山地教授, 船守准教授, 平田室長, 新妻係長, 林係長(国立情報学研究所)

(事務局)

小野課長, 片岡副課長, 古橋係長, 脇谷係員(国立情報学研究所)

4. 議事:

(1) 前回議事要旨について

メール審議を経て 9/11 付で確定したため, 委員会内での確認は割愛した。

(2) 2020 年度学術情報流通推進委員会活動報告【報告】

事務局(古橋係長)より, 資料 2 及び参考資料 3-1-1~3-3 に基づき説明後, 武田委員長及び野崎委員, 林委員より最新状況について以下の補足説明があった。

【arXiv について】

- ・ 12 月に開催された Member Advisory Board において, 新しいメンバーシッププランが策定された。
- ・ Tier の設定基準を変更し, 投稿数だけではなくダウンロード数も基準とすることが盛り込まれており, さらに大学だけではなく企業も対象としていく, という議論があった。
- ・ 既存の会員は 2022 年以降から適用され, 徐々に増額するプランになっている。

【CLOCKSS について】

- ・ 特に大きい変化はなく, 収支的には問題なく健全である。

【SCOAP3 について】

- ・ 現在フェーズ 3 の 1 年目にあたるが, コロナ禍で各機関の財政状況が不透明なため, フェーズ 3 を 2 年延長することとなった。この間は, 各国の分担金も従来通りの割合を踏襲する。
- ・ 日本に対する期待額と拠出額とのギャップについては, 今年度は研究コミュニティのうち 3 機関から拠出いただいた。今後も関係機関に対して継続して要請していく。
- ・ 書籍に関する取り組みである SCOAP3 for Books について, CERN が出版社とデジタル化・著作権に関して現在交渉中である。

【SPARC Japan セミナーについて】

- ・ コロナ禍以前よりストリーム配信を実施しており、今年度のような状況下であっても、大きな問題が生じることなく、オンラインのみの開催に移行することができた。また、オンライン開催にしたことで従来の会場参加者とストリーム視聴者を合計した人数よりも多くの参加があった。
- ・ オンライン開催では、登壇者同士のコミュニケーションに課題があり、今後もオンラインならではのコミュニケーション手段を検討していく必要がある。

【arXiv・CLOCKSS・SCOAP3 について】

- ・ 学術情報流通事業には費用が発生するという点について、理解を深めてもらうためにも、国内の大学図書館だけでなく、大学本体に対しても働きかけていく必要がある。

(3) ポジションペーパーの取りまとめについて【審議】

事務局(古橋係長)及び武田委員長より、資料 3-1～3-3 に基づき説明後、内容についての質疑応答及び下記意見交換を行った。審議の結果、意見交換を元に、資料 3-2 について再作成し、次年度の委員会で継続審議をすることとなった。

- ・ オープンデータの話題が登場した当初に比べて、昨年度あたりから、研究者にデータをオープンにすることの意義が理解されつつあると感じている。その意識の変容や意識が変容した延長で何ができるのかという点について、どこかで言及してはどうか。
- ・ 国際的・社会的な課題に対処するには、科学と様々な分野が結びつく必要があるが、コロナ禍でその動きが進みつつある。学術の間の敷居を乗り越えることの価値や、分野横断のアクセスの実現についてトピックスとして入れるべきではないか。
- ・ なぜ学術情報流通が重要なのか前面に出してはどうか。EBPM(エビデンスに基づく政策立案)というキーワードが多用されているが、学術情報流通こそがそのエビデンスを提供する仕組み。コロナ禍においては、テレビ番組で「査読」といったキーワードが聞かれることがあり、学術情報流通はアカデミアの中だけではなく、社会の中でも重要な役割を果たしていることを表現したい。
 - ▶ ユネスコのオープンサイエンスに関する報告書へのパブリックコメントに、サイエンスコミュニケーションという視点を入れてほしいとの声が複数あった。社会にサイエンスを分かりやすく伝える必要性というのは同じ視点だと考える。
 - ▶ ビッグビジョンをしっかりと共有した上で、SPARC Japan では大学コミュニティの立ち位置から問題を考える、といった、フレーミングについて慎重に議論していきたい。
- ・ 「健全な学術情報流通」という表現について、先ほどのサイエンスコミュニケーション的に噛み砕いた表現にしていく必要があるだろうと感じた。
- ・ 「学術がどう評価されるか」という観点がある。プレプリントにも価値があることを示さなければ、「査読が済んでいないので政策に反映しなくても良い」となってしまう。また、ジャーナルで評価される分野では、社会に成果を日本語で分かりやすく伝えることは二足の草鞋となる。社会的ニーズに応えることも評価されるという観点を考慮する必要がある。
- ・ 学術とは何か、といった議論は、前提となる背景が 2,3 年で変容するため、ある程度どこかで固定してまとめていく必要がある。

(4) アドボカシー活動の実施における広報物の作成及び公開について【審議】

事務局(古橋係長)より、資料4に基づき説明後、下記意見交換を行った。
審議の結果、提案通り年報は廃止し、ニュースレターは発行頻度を年1回とすることとなった。

【広報物の作成及び公開について】

- ・ SPARC Japan セミナーで作成しているドキュメントについては、今後も継続される、という認識で間違いないか。
 - 間違いない。
- ・ SPARC Japan セミナーの資料・動画等も含め、公開方法について再検討してはどうか。また、ニュースレターを NII リポジトリに登録し、DOI の付与等、流通方法について見直すことも検討してほしい。
 - 承知した。

(5)2021 年度 学術情報流通推進委員会の活動について【審議】

事務局(古橋係長)より、資料5-1, 5-2に基づき説明後、下記意見交換を行った。
審議の結果、「学術情報流通の動向に係る調査」については、次のようにすることとなった。
今年度の調査結果に関して、委員会までに報告書が公開されなかったものの、昨年度と同様の報告書が作成・公開されることを前提として、調査方法及び公開内容について検討をする、という文言を追加し、承認することとなった。

【SPARC Japan セミナーのテーマについて】

- ・ 図書館職員の参加が多いため、コロナ禍で学生がキャンパスに行けない状況下での取り組みの紹介等、現場の業務に直結するテーマの扱いがあってもよいのではないか。
- ・ ここまでの議論で、学術情報流通業界と研究者との間には少し乖離がある、という話があった。研究者にもリーチする話題を提供し、J-STAGE セミナーや AXIES など外部の関係機関が開催するイベント等と連携して参加者層を広げてはどうか。

【学術情報流通の動向にかかる調査の提言について】

- ・ 調査に関するより詳細なデータ公開を進めるべきではないか。欧米では個別の機関名を出してデータを公表できており、日本でも同様の公開に向けて取り組むべきだと考える。
 - 現時点で利用しているデータ提供元と公開範囲に関する交渉はしているが、提供元が求める制約があり、難しいのが現状である。
 - 特定のデータソースに依存せずに、他のソースの利用も検討してほしい。
 - 例えば元データそのものではなく、加工データだけでも公開できないか等、再度確認してほしい。
- ・ 会員館だけでなく、全ての図書館の活動が広く社会に認知されるような取り組みをしていく、という方向で、今後の活動についてもデジタルトランスフォームする必要があるのではないか。

(6)その他

委員は2年任期であるため、次年度委員については改めて各委員と相談し、委嘱手続きに入る点について、武田委員長からコメントがあった。
ほかに議題等がないことを確認し、終了した。